

平成二十八年 度 入 学 試 験 問 題 (二次)

国 語

(時間 五十分)

〔注意事項〕

- 一 試験開始の合図まで開けてはいけません。
- 二 受験番号・氏名を解答用紙に記入しなさい。
- 三 試験問題は五題あります。印刷がはつきりしなかったり、問題がぬけていたりした場合は申し出なさい。
- 四 解答は解答用紙に記入しなさい。
- 五 解答用紙だけを提出しなさい。

次の——線部の漢字の読み方をひらがなで答えなさい。

- 1 あたたかい讚辞さんじを受ける。
- 2 病やまひが小康状態を保つ。
- 3 話し相手の毒気どくけに当てられる。
- 4 鋼はがねのような肉体。
- 5 歴史に名を刻む。

次の——線部のカタカナを漢字に直して答えなさい。

- 1 カンセイ官の指示に従って着陸する。
- 2 コイに車をぶつける。
- 3 キリスト教のデンドウ師。
- 4 明日の天気をやぶむ。
- 5 人前では泣くまいとツトめる。

るのか。怪しいぞ。」

それから紋太は、大人たちの真似をして卑猥なことを言った。洪作はいきなり紋太に飛びかかっていた。腕力では紋太に対してとうてい勝味はなかったが、そうした衝動をおさえることはできなかった。

洪作は紋太を地面にねじふせていたが、いつでも自分がはね返され、相手に組みしかれることを感じていた。紋太は落ち着いて細い道の上に横たわっていた。洪作の為すままに任せているといったふてぶてしい態度だった。

紋太はやがて、

「どれ、これからとつちめてやるぞ。」

そんなことを言うと、それといっしょに大きな掛声をかけて、力任せに洪作をはねのけた。そしてすっくりと地面の上に立つと、洪作のほおを平手で二つ三つなぐってから、いきなり洪作の傍を離れて、あき子を真ん中にして去っていきつつある少女たちの一団を追った。

洪作は、紋太が女たちの中に割りこみ、あき子の前に立って、何か厭がらせを言っているのを見た。あき子の悲鳴が上がった。紋太はあき子の着物の裾をまくろうとしていた。

洪作は夢中でそこへ飛びこんでいくと、紋太を押しつけた。紋太は飛びかかってきた。こんどは本当の攻撃だった。洪作は紋太にたちまちにして組みしかれたが、その時夢中で、手に触れた石で相手の顔をなぐった。紋太は叫び声を上げて立ち上がった。洪作は自分をとめることはできなかった。石を握ったまま相手に飛びかかっていた。洪作は紋太の額から血が流れ出しているのを見た。血を見ると、洪作は

### 三

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。(抜き出して答える問題では、句読点、かぎかっこ等の記号は一字として数えること。)

遠くに住んでいる父母と離れて、母方の祖父の家(上の家の近くにある土蔵で、おぬい婆さんと二人で暮らしている洪作は、二学期になって都会から転校してきたあき子にひそかに好意を持つようになっていた。ある朝ランニングをしている女子の先頭を走っているあき子が、大きな落とし穴に落ちてしまった。その落とし穴をほった一団が穴からはいあがろうとするあき子を笑い、はやしたてていた。

洪作は烈しい怒りを感じた。自分が落とし穴にはまった場合でも、これほど烈しい怒りは感じなかったにちがいない。洪作はゆっくりと宿の子どもたちの方へ歩いていった。

「だれが作ったんだ？」

洪作の見暮がすさまじかったので、数名の子どもたちはいつせいに逃げだした。1を散らすように、小さい坊主頭が畦道を走っていく。

「だれだ。だれがやった？」

洪作は残っている子どもたちの方を睨んで立っていた。すると、腕力の強いことを自慢にしている同級生の倉石紋太が、どこからともなくのっそりと姿を現わして、洪作の前に立った。洪作は黙って相手を睨みつけていた。厭なやつが出てきたと思った。

1「おれがやった。悪いか？」

紋太は言った。

「なんだ、あき子が落とし穴におっこつたのを、お前が代わりに憤

一層昂奮した。

洪作は石を握ったまま紋太を追っていった。紋太は狂人のようになつた洪作に怖れを感じたのか、畦道を逃げまわった。洪作は紋太に追いつくと、すぐまた石でなぐった。

逃げる紋太も必死だったし、それを追う洪作も必死だった。洪作は自分のそうした狂人のような執拗な攻撃をとめることはできなかった。

洪作はやがて自分が紋太を追っていた神社の前で、仕事着の村人に背後から抱きすくめられるのを感じた。

「ばか！」

男は言った。そして洪作の手から石を奪うと、もう一度、

「ばか！」

と怒鳴った。

「気がふれたんか、お前は。」

それに対して洪作は黙っていた。自分がいまままで何をしてきたか、よくは判らなかつた。ひどく狂暴なものに取りつかれ、自分でも理解できぬ荒れ狂い方をしていたと思つた。

村人が三人田圃の向こうから駈けてくるのが見えた。その時、洪作

に初めて、自分は何かともんでもないことを仕出したのに違いないという思いがやつてきた。

洪作が紋太と喧嘩し、紋太の額を石で傷つけた事件は、平生これと違って変わったことのない村では、一つの出来事であった。紋太の父親は畳屋で、四、五年前に他国からこの村へやってきて、いつとはなしにこの村に住みついてしまった人物であった。紋太は父一人子一人

で、母親を持つていなかった。紋太親子が湯ヶ島へ初めて姿を現わした時から、母親の姿は見えなかつたので、紋太は幼い時に母親を亡くしているらしかった。

洪作が紋太を傷つけた昂奮を心にも体にもいっぴくつつけたまま、土蔵へ帰ってきた時、おぬい婆さんはすでに事件を知っていた。洪作と紋太の喧嘩を目撃していた子どものだれかが注進<sup>5</sup>におよんだのであった。

おぬい婆さんは土蔵の前に立っていた。これから事件のあった現場へ駆けつけようとして土蔵を出たばかりの時であった。おぬい婆さんは洪作の顔を見ると、洪作がどこかに傷を受けてはいはまいかと、頭のとっぺんから足の先まで **2** と見まわしてから、

「洪ちゃ、どこも何ともないな。」

と、念を押して、それからさも安心したといったように肩を落として、大きい溜息をついた。そして洪作が無事だったという安心でしばらくの間黙ってぼんやりしていたが、やがて新しい昂奮に襲われたらしく、急に威丈高<sup>6</sup>になって喚きだした。

「洪ちゃ、土蔵へはいっておいで。洪ちゃに手など上げてみい。ばかもんめ！」

相手がそこにも居るように、おぬい婆さんは怒鳴った。そこへ上の家の祖父と、幸夫の母親がやって来た。祖父は洪作の顔を見ると、

「ばかもん！」

いきなり怒鳴った。そして **3** を噛み潰したような表情で洪作に近づいてくると、洪作の額を二本の指で小突いた。

と洪作を睨みつけると、いきなり背を向けて歩きだした。

「婆ちゃ、じいちゃんの言うように、洪ちゃを謝らせておく方が無理じゃ。そうなせえ、そうすることじゃ。」

幸夫の母が横から口を出した。洪作はこのころになって、自分が何をしてきたかに気付いた。自分の仕出かしたことが、どうやら容易ならぬことらしいことを知った。

洪作は黙っておぬい婆さんの傍を離れると、祖父のあとを追って上の家へ向かった。往来へ出ると、道の真ん中に立って、二、三人の近所の内儀<sup>7</sup>さんたちに取り巻かれて上りの家の祖母の姿が眼にはいった。祖母は洪作の姿を見ると、

「洪ちゃ、あなた、だいそれたことして！早くじいちゃんと謝ってきなさい。悪かった、悪うございました。何を言われても、悪かった、悪うございました。な、洪ちゃ、みんな、洪ちゃが悪かった、悪うございました。」

そんなことを憂わしげな表情で言ってから、

「謝ってきたら、このばあちやが、おはぎでも甘酒でも作ってあげる。な、洪ちゃ、みんな洪ちゃが悪かった、悪うございました。」

洪作は一言も口から出さず、そこを離れると、上の家の前まで行き、丁度そこへ出て来た祖父に近寄っていった。

「ばかもん、ついて来な。」

祖父は歩きだした。祖父はいつものように鼻の頭を赤くしており、歩きながら、時々、小さくたたんだ手拭いでその鼻の頭を拭っていた。

洪作は祖父に連れられて、郵便局の隣にある山城医院へ行ったが、

「じいちゃ、何する？」

おぬい婆さんが祖父に喰ってかかった。

「手荒なことをしてもらうまい。あんたらのところの子どもと一緒にしてもらっては困る。平生顔も出さんといて、こんな時だけ、洪ちゃを叱りに来くさる。」

「叱らねばならん時は叱りに来る。それが何が悪い。」

祖父はいつになく烈しくおぬい婆さんを決めつけ、そして再び洪作に、

「ばかもん。平生意気地なしだと思っていいたら、とんでもないことを仕出しおる！さ、来なさい。一緒に謝りに行くんじや。」

洪作は、祖父にこんな烈しく叱責されたことはなかった。祖父の顔が全く別人に見えた。

「なんで、洪ちゃが謝りに行かねばならぬ。」

おぬい婆さんも敗けてはいなかった。

「洪作はよその子どもを傷つけたんじや。相手はいま医者へ行つとる。」

「これは驚いた！喧嘩は両成敗じや。洪ちゃが喧嘩して相手を傷つけたとしても、それが何じやるか。あれさ、驚いた！じいちゃ、もうろくしたか。」

「うるさいな。お前さんは黙つとれ。」

「黙っていられるかや。」

<sup>6</sup> 黙っていらなくても、黙っておれ。」

それから祖父は、

「洪、ついて来い。」

紋太は治療して、すでに家に帰ったということだった。

「ばかもん、ついて来な。」

祖父は医院の門を出ると、さつきから何遍となく口から出した同じ言葉を言つて、それから宿部落の外れにある畳屋へと向かった。畳屋では、板敷の部屋で、紋太の父親が畳を作っていた。短く刈りこんだ頭髪が白かった。

「このばかもんが、とんでもないこと仕出かして、あんたこの子どもに傷をつけたそうじや。いま、折檻<sup>8</sup>して、ここへ連れてきた。腹も立とうが、ひとつ、勘弁してやってくれんかな。」

祖父は言った。そして、

「洪、頭を下げえ。」

と、洪作の方へ顎をしゃくつた。すると、紋太の父親は、仕事の手を休めて、

「なんの、なんの。」

と言った。

「子どもは喧嘩が商売じや。紋のやつ、泣き面して帰ってきたんで、いま、頭を二つ三つ小突いて学校へ追っばらつたところですじや。なんの、詫びることがありますかいな。お宅の坊の方がよっぽど度胸がすわつとる。紋のやつはからきし意気地がありませんわ。喧嘩したからにや、洪ちゃのように、相手の頭を石でかち割るぐらいの元気がなくちゃいけませんわ。わしなど子どもの時から、何回喧嘩したか算え切れませんが、敗けたことなど一度もねえ。相手の腕をへし折つたこともあります。謝りに行ったことはねえです。喧嘩ですもん、旦那

那、謝ることはいりませんわ。子供の喧嘩で謝っていた日にゃ、あんな、わしなど毎日謝ってばかりいて、仕事なんか出来やあせん。」それから紋太の父親は奥へ行って、蜜柑を小さい筥に入れて持ってくる。

「洪ちゃ、勝った褒美じゃ。これ喰いながら、学校へ行きなされ。」

そう言つて、洪作にその蜜柑を差し出した。洪作はいま学校では授業が始まっていることに、この時初めて気付いた。

畳屋からの帰り道、祖父は一言も喋らなかつた。洪作も一言も言わないで上の家の前で祖父と別れると、すぐ土蔵へ帰つた。おぬい婆さんは、大根を土蔵の横手に干していたが、洪作の姿を見ると、

「どうじゃった？」

と、まださつき前の祖父との言い争いの昂奮のさめない顔で言つた。

「畳屋の小父ちゃんがこれをくれた。」

洪作は筥にはいった蜜柑をおぬい婆さんの方へ差し出した。

「憤つとつたか。」

「ううん。」

「それれみなされ。自分のとこの子が悪いのに、憤れるはずがない。」

それから、

「ばかもん！」

と、吐き出すように言つた。この「ばかもん」という言葉は 4 に向かつて吐き出されたものであつた。

洪作は土蔵の入口に投げこんであつた教科書の包みを持つと、すぐおぬい婆さんから離れていった。洪作は学校へ向かう自分の足の重い

のを感じた。学校へ行くと、何か処罰されるのではないかと思つた。

洪作は何となく顔中傷だらけにした紋太が教室の中に坐つていそうな気がした。算術の授業時間であつた。洪作は覚悟をきめて教室の戸を開けた。いつせいに三十人ほどの生徒の目が洪作に集まつた。師範の二部を出たばかりの若い教員が、洪作の席につくのを待って、

「喧嘩はいかん。」

と言つた。

「判つたか。」

「判りました。」

洪作は答えた。これから叱責が始まると思つたが、すぐ授業は続けられ、叱責はそれで終わった。洪作は自分より二列ほど前の右手の方に、頭部に白い繻帯をした紋太が、いつもより神妙に坐っているのを見た。

授業が終わると、教員は紋太と洪作を教壇の傍に呼んで、「これから一度でも喧嘩したら二人とも学校へ置くことはできん。判つたな。」と、ただそれだけ言つた。教員が去つていくと、紋太はひどく複雑な表情をして洪作を見守っていたが、やがて眼と鼻と口とを一カ所に集めて、何とも言えぬ憎たらしい顔をすると、

「ふーんだ。」

と、顎を突きだし、そしてすぐ洪作に背を向けた。洪作は黙つていた。

8 紋太のそうした仕種は憎々しかったが、しかし、これまでの紋太とは違って、どこかに弱々しいものがあつた。洪作は紋太の父親によって、何か正体の判らぬ感動を吹きこまれており、紋太を傷つけたことで心

問一 □ 1・3 に入ることばをそれぞれひらがな四字で答えなさい。

問二 —— 線部5「注進におよんだ」の意味として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア おおげさに話を作つた    イ こっそり告げ口した  
ウ みんなに言いふらした    エ 急いで知らせた

問三 □ 2 に入ることばとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア おずおず    イ まじまじ  
ウ さんざん    エ しみじみ

問四 □ 4 に入ることばとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 祖父    イ 紋太    ウ 紋太の父    エ 洪作

問五 —— 線部7「の」と同じ働きをする「の」をこれより後の文章中から直前のことばと一緒に三字で抜き出して答えなさい。

が痛んでいたが、いまの紋太の相変らずの態度でかえつて救われた気持ちだつた。紋太はやつぱり厭なやつだと思つた。

(井上 靖 『しろばんば』による)

\*卑猥な〓いやらしい。

\*執拗〓しつこい。

\*威丈高〓相手をおさえつけるような態度。

\*内儀さん〓家庭の主婦。

\*折檻〓きびしくしかること。

\*師範の二部〓教員養成学校の夜間部。

問六 —— 線部1「おれがゝ悪いか」とありますが、このときの紋太を説明したのとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア いたずらをしたのが自分であるということをかくそうともせず、腕力に自信があるので開き直っている。

イ あき子の日ごろの行動にはいたずらされても仕方がないところがあるので、当然の仕打ちだと思っている。

ウ 洪作の怒りを買うことを承知の上でいたずらをしかけて、洪作に対してけんかを売っている。

エ あき子に対するひそかな好意をどう表現していいかわからずに、身近にいる洪作に八つ当たりしている。

問七 —— 線部2「こんどはゝ攻撃だった」とありますが、これ以前の攻撃を述べている部分を文章中から十五字以内で抜き出し、その最初の三字で答えなさい。

問九 —— 線部4「その時ゝやってきた」とありますが、この部分の表現について説明したのとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「その時」と時間を明示することで、今までの時間の流れがとぎれて洪作が長時間紋太を攻撃していたことが強調されている。

イ 「初めて」という直接的なことばが入ることで、それまでと全く別の洪作がいることを表している。

ウ 「仕出かした」という強い語調のことばを使うことで、洪作の攻撃が一方的な暴力だったことを暗示している。

エ 「思いがやって来た」と第三者的な言い方をすることで、洪作が自分を取りもどしたことを効果的に表現している。

問十 —— 線部6「黙っていらなくても、黙っておれ」とありますが、このときの祖父の気持ちを説明したのとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア おぬい婆さんのあまりの見幕にあきれはてて、少し冷静さを取りもどしてほしいといさめている。

イ おぬい婆さんの筋の通った理屈に返すことばが見つからず、このままでは言い負かされてしまうと恐れている。

ウ おぬい婆さんとともに議論しても理屈が通じないことを理解して、とにかく話を打ち切ってしまうとしている。

エ おぬい婆さんの話にいつまでも付き合っているのは謝りに行けないので、とりあえず適当に相手をしている。

問八 —— 線部3「洪作はゝできなかつた」とありますが、このときの洪作を説明したのとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 好意を寄せているあき子がひどい目にあっているのを見て、紋太の思いつきやろと飛ばかかっていたが、

ひるんでしまった紋太をここぞとばかりにやりすぎてしまった。

イ 好意を寄せているあき子がひどい目にあっているのを見て、後先を考えずに自分より強い紋太に飛びかかっていたが、紋太が流した血を見ることでそれまで以上に自分を失ってしまった。

ウ 日ごろから腕力を自慢している紋太をいつかはやつつけてやりたいと思っていたので、相手に非がある今日こそが決着をつける絶好の機会だと判断して、徹底的になぐってしまった。

エ 日ごろから腕力を自慢している紋太をいつかはやつつけてやりたいと思っていたので、他の子どもたちが見ている前で決定的な痛手をあたえようと、石まで使って攻撃してしまった。

問十一 —— 線部8「紋太のゝあつた」とありますが、これを説明したのとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 本当はたいした度胸もないのに強がってばかりいる紋太はかわいそうなやつだが、強がることによってかえってみじめさが感じられる。

イ 教員からの注意にも従わない紋太はとんでもないやつだが、叱責されたことよって自分に対するいやみの程度はうすらいできている。

ウ いつまでも喧嘩の余韻を引きずっている紋太はしつこいやつだが、先生に知られたことよって以前のしつこさではなくなっている。

エ 相変わらず紋太は厭なやつだが、洪作に傷つけられて血を流してしまったことよってそれまでの両者の関係に変化が生じはじめている。

問十二 この小説の登場人物について説明したものとして適切なものを二つ、選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 祖母は、洪作はとんでもないことをしてかしてしまったけれども、洪作をだましてでもとにかく謝らせてしまえば何とかなると考えているような、楽観的な人物である。

イ おぬい婆さんは、洪作のことを溺愛しており、洪作のかかわっている物事に対しては冷静な判断ができないでいるような、感情的になりやすい人物である。

ウ 祖父は、洪作が紋太に怪我をさせてしまったことを重要視しており、一刻も早く謝罪をしなければ大変なことになってしまうと恐れているような、小さな人物である。

エ 教員は、この喧嘩について深く追求しないほうが今後の二人の関係にとっては良いと推察してわざとそっとしておくような、子どもの気持ちに寄りそうことができる人物である。

オ 紋太の父親は、自分のむすこがけがをさせられたにもかかわらず、喧嘩に勝った洪作の度胸をたたえてほうびまでくれるような、度量の広い人物である。

カ 紋太は、他人への感情をすなおに表現することが苦手なために、つい腕力にたよったり人のいやがることをしたりするような、性格のゆがんだ人物である。

が手づくりだす「もの」であると言ってもいいかもしれません。「話し言葉は身体が起こすことである」ということについて、さらに補足すると、話し言葉というのは、人が他人と関わるときに「演技」の一部でもあります。「ありがとう。」の一言でも、冷たい事務的な「ありがとう。」や、やさしい「ありがとう。」、甘えたような「ありがとう。」……、元気のよい「ありがとう。」、かつたるような「ありがとう。」……、口調と声音の違いだけでも、実にさまざまに「ありがとう。」を言うことができます。人は、相手によって、場面によって、これらを使い分けている。そっぽを向いてほそつと「アリガト。」と言ってみたり、お辞儀をしながら「ありがとうございます。」と丁寧にしてみたり、勢いよく短縮して「あざーっす。」と言ってみたりもする。【一】書き言葉には、こういう芸当はできません。ただ「ありがとう。」と書くだけです。肉筆で書く場合、ぞんざいに書いたり丁寧な書いたりすることはできませんが、そのときの感情や気分を、この一文だけで表現することは基本的にできません。だから「ありがとう」に限らず、書くときには、あれこれの工夫が必要になるわけです。メールで使われることが多い、「笑」や、顔文字、絵文字もそういう工夫のひとつとして発達したのでしょうか。【二】そういうえば、今や、あるていど親しい相手へのメールには絵文字や顔文字を入れるのが、ごく普通になつていくようです。絵文字がないと a 冷たい感じがして「怒ってるみたいに見える。」ということらしい。これを最初に聞いたときは「へえ、いまどきの若者はそこまで気をつかうのか、大変だねえ。」などと思っただけでも、その後あれこれ見聞きしたところ、 b こ

#### 四

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。(抜き出して答える問題では、句読点、かぎかっこ等の記号は一字として数えること。)

人間が使う言葉には、おおまかに言って、話す・聞く言葉と、書く・読む言葉との二種類があります。前者が話し言葉、後者が書き言葉。両方ともコミュニケーションや表現に使いますが、話すときと書くときは、コミュニケーションとしても表現としても性質が異なります。ここで考えたいのは、もちろん書き言葉のことですが、まずは、この両者の違いを踏まえるところからはじめてみましょう。

実際に喋ったり・聞いたり、書いたり・読んだりする場面を思いだしてみれば、話し言葉と書き言葉とは、言葉としてのありようが、決定的に違っていることが分かります。

話し言葉は、おもに声帯を使って発語され、耳から入ってくる。基本的に「音」であつて、目に見える形はなく、発語されたその瞬間に消えている。一方の書き言葉は、おもに手を使って発語され、目を通して受け取る。基本的には、紙に記された黒鉛やインクの「よこれ・しみ」あるいは液晶画面上のドットの寄せあつめです。こちらは、書かれた瞬間から形をもつて存在し続け、とりあえずいきなり消えることはない。

一方が音声で、もう一方は文字。あたりまえのことじゃないかと思うかもしれませんが、この違いは決定的です。別の言いかたにするなら、話し言葉は人間の身体が起こす「こと」で、書き言葉は人間

の「メールには絵文字」というのは、若い人だけでなくけっこうな年齢の人でもやっているらしい。【三】そこで、あらためて自分の携帯やパソコンに残っている送信済みメールをいくつか見ると、文面によっては、 d 事務的な冷たい感じがしないでもない。「十五分遅れる！」に「了解。」とか、「都合が悪くなりました。」に「わかりました。では、いつにしますか。」とか、内容が内容だけに、むっとなんとおもうか。【四】書き言葉で微妙なニュアンスを表現することの難しさが、よく分かります。とくにプライベートなメールの場合、雰囲気としては話し言葉に近いから、よけいにギャップが大きく感じられるのでしょうか。

話を元に戻すと、話し言葉と書き言葉とは、そもそも発語される場面や状況が大きく異なっています。話すときは、たいていの場合、話しかける対象が自身の現在形で存在している。だから、ひとりごとを除いて、その場で誰かがうなずいたり、笑ったり、突っこんだり、無視してくれたりする。人はそれらの反応を意識し、その影響を受けながら言葉を発するわけです。反応が言葉である場合は、そこから新たに言葉のやりとりが始まったりもします。

一方、書くという営みは、基本的に一人で行うのです。たとえば誰かにあてて書く場合でも、そのあて先になる他人は目の前にはいないし、その場で反応を確かめられるわけでも、そこから会話が始まるわけでもない。

あらためて言います。書き言葉には、<sup>5</sup> 音声や表情や身振りのような補完的要素がない。純粋に、文字という「2」だけで勝負しな

ければならない。また、書き言葉には、その場での **3** もない。

話し言葉には、状況に即応する瞬発力がありますから、言葉のやりとりから、場の「ノリ」をつくりだすこともできます。うまくかみ合った会話が、ちょうどいいテンポで弾むと時間を忘れるくらいに楽しい。テレビに出ているお笑いの人みたいな「運動神経」のいい人がいれば、本当に面白くなることもある。

じっくりと丁寧に考えながら、誰かと「話しこむ」のもいいです。そういう経験は、その「誰か」と「私」との関係を深めるだろうし、場合によっては何か大事なことを考えたり、学んだりする機会にもなるでしょう。

ただし、話し言葉には言葉としての無駄が多い。またその時々之感情やその場の空気に影響されやすいこともたしかです。だから話し言葉は、多くの場合、言葉としては表面的なものになりがちで、しかも、忘れてしまいがち。

書き言葉には、みんなでわいわいとバカ話をして盛り上がるような楽しさはありません。対話をとおして誰かと互いに分かり合っていくような経験も伴いません。そのかわり、人と話すのが苦手な人、コミユニケーションが不得意な人でも発語することができます。そこにいる誰かに気をつかったり、場の空気を読んだりする必要ありません。何かをじっくりと、自分のペースで解きほぐしたり、掘りさげたりしながら、より丁寧に、より深く考えるために、もつといえれば自分のなかの深いところまできちんと表現するためには、書くことがいちばん有効な手段なのです。

く分かります。新しい技術は、人間の能力を拡張すると同時に、本来持っていた力を退化させる。僕自身も、ワープロ・パソコンを使うようになってから、字を忘れることが多くなったのはたしかです。学生時代には、十数人分の電話番号を覚えていたのに、番号を登録できる携帯電話を使うようになってからは、かろうじて実家の番号くらいしか覚えていない。これも似たようなことでしょう。同じようなことが、ソクラテスの生きたギリシャ時代にもあっただろうという想像はできます。日本の場合、書き言葉が入ってきたのもっと遅いので、その影響は記憶力の問題以外にも何かしらあったでしょう。どんな便利な、画期的な技術だって、いいことばかりあるわけではない。

**h**、書き言葉という新しい技術の登場と「文明」とが結びついているのは、確かなことで、人類がどれほどその恩恵にあずかってきたのかは、言うまでもありません。

書き言葉という新技術を手に入れたことが、いいも悪いもひっくり返して、人間にとってどういう意味を持つのか。ここには、ただ忘れっぽくなっただけでなく、もつと大事なことが、いろいろあると思います。実際、このテーマだけで論文が何本も書けるくらい大きなことなのですが、あれこれ考えるときりがないので、ここでは、ざっくりと二つの点を押さえておきます。

第一に、書き言葉によって始めて、人間は **4**。

第二に、「書く」場面にそくして考えれば、もうひとつ重要なことがあります。それは、書き言葉を用いることで、始めて、人は「自身と向き合う」<sup>10</sup>。「自分自身に問う」ことができるようになったと

**e**、話し言葉と書き言葉、どちらが先に獲得されたのかといえ

ば、話し言葉のほうが先に決まっています。人類がどれだけ大昔に言葉を獲得したのか、もちろん正確には分からないけれども、おおよそ五万年前、二足歩行を始めたのとはほぼ同時期らしいと推定されています。**f**、書き言葉はいつごろから使われていたのか。これまた定かではないのですが、最古の文字と言われる絵文字は、古代エジプトや古代メソポタミアや、古代中国の遺跡から見つかっていて、いずれも数千年前のものだそうです。いちばん最初の絵文字は、まだ「言葉」ではないけれども、それを発点として、話し言葉に対応した書き言葉が徐々に整備・開発されたと考えられます。

言葉の獲得から五万年として、書き言葉はたかだか数千年。「文明」というのもそうだけど、人類の歴史からすれば意外に新しい。長い間話し言葉だけでやってきた人間が「文明」を築き始めるのとはほぼ同時期に獲得した「新技術」が書き言葉だったということです。ちなみに、この新技術が日本に伝わったのは、もつと時代がくたって、おおよそ二千年前。かなり新しいです。

書き言葉という、この新しい技術によって、始めて、それまで「音」でしかなかった言葉を目に見える「形」にしてあらわすことが可能になり、それを残すこともできるようになった。このことが、人間にとって、言葉にとって、どれだけ大きなことであつたのか。ちょっと想像しただけでも気が遠くなるような話です。

**g**、ソクラテスという哲学の元祖みたいな人は「書き言葉のせいで人間は忘れっぽくなった。」と、言っていたらしい。これは、よ

いうことです。

(森下 育彦 『私』を伝える文章作法)による)

\*ドット＝コンピュータなどで文字を表示する小さな点。

問一 **a**、**d**に入ることはの組み合わせとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- |   |   |      |   |      |   |      |   |      |
|---|---|------|---|------|---|------|---|------|
| ア | a | なるほど | b | いかにも | c | どうやら | d | なんだか |
| イ | a | いかにも | b | なるほど | c | なんだか | d | どうやら |
| ウ | a | どうやら | b | なんだか | c | いかにも | d | なるほど |
| エ | a | なんだか | b | どうやら | c | なるほど | d | いかにも |

問二 **2**・**3**に入ることはとして最も適切なものをこれより前の文章の中からそれぞれ二字で抜き出して答えなさい。

問三 ——線部7「話しこむ」とありますが、この「こむ」と同じ用法のものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- |   |       |   |       |
|---|-------|---|-------|
| ア | みがきこむ | イ | なぐりこむ |
| ウ | あがりこむ | エ | なだれこむ |

問四 □ eからhに入ることばの組み合わせとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア e それでも f そもそも g では h ちなみに  
イ e そもそも f では g ちなみに h それでも  
ウ e ちなみに f それでも g そもそも h では  
エ e では f ちなみに g それでも h そもそも

問五 — 線部9「本来持っていた力」とは何ですか。文章中から三字で抜き出して答えなさい。

問六 — 線部①～⑤の熟語の中で構成の異なっているものを一つ選び、数字で答えなさい。

問七 — 線部1「話し言葉とく違っている」とありますが、この違いを説明した部分をこれより後の文章中から十字以上十五字以内で抜き出し、その最初の三字で答えなさい。

問十 — 線部4「話を元に戻す」とありますが、戻す場所として適切なところを文章中の【一】～【四】の中から選び、漢数字で答えなさい。

問十一 — 線部5「声音く補完的要素」とありますが、このことを具体的に説明している部分をこれより前の文章中から抜き出し、その最初の三字で答えなさい。

問十二 — 線部6「運動神経」のいい人」とありますが、これを説明したものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 人を笑わせる能力に優れていて、どんなつまらない話題でも面白く展開することができる人。  
イ たくさんのお話を知っただけでなく言葉に対する感覚がすぐれ、何にでもすぐに答えることができる人。  
ウ 話芸にひいでており、同じ話でもその人の口から出てくるとたんにおもしろさが倍増するような人。  
エ 話し相手の発言を上手に取りこんで、その発言を生かしながら素早く気のきいた言葉を返すことができる人。

問八 — 線部2「話し言葉とくあります」とありますが、これを説明したものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 人が他者と話すときには自分のすべてをさらけ出すことはなく、どこか無意識のうちに自分を取りつくりよう。  
イ 話し言葉は単独で言葉だけが存在するのではなく、表情や身ぶり手ぶりがともなって口調にも感情が出る。  
ウ 話し言葉は身体を通して発せられるという特徴があり、身体表現である演劇的要素がおのずとふくまれる。  
エ 人が他者と話すときには相手はどう思っているのかが気になり、その結果相手の調子に合わせてしまう。

問九 — 線部3「肉筆」とありますが、この対極にあるものを具体的に説明している部分をこれより前の文章中から十五字で抜き出し、その最初の三字で答えなさい。

問十三 — 線部8「新技術」とありますが、これを説明したものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 世界各地で起こった古代文明の発達が生み出した、世界共通の統一言語。  
イ 話された先から消えていく言葉を書き残すことができるという、人類に恩恵をあたえる画期的発明。  
ウ 言葉を獲得する能力をこれまでと比べて格段に向上させた、革新的な記述方法。  
エ 人間の能力を拡張させるためにそれまでであった絵文字に工夫を加えた、体系的記号。

問十四 — 線部10「書き言葉をくできるようなった」とありますが、「話し言葉」では「自分自身と向き合う」ことができ、理由を述べている部分を【四】より後の文章中から二十五字以上三十字以内で抜き出し、その最初の三字で答えなさい。

問十五 □ 4に入る内容を「空間的」「時間的」な観点を押さえながら二十字以上三十字以内で解答欄に合せて答えなさい。

五

次の1〜5の語に、A群の中の漢字の部分を組み合わせてできる漢字をつなげて、B群の中の漢字の部分を組み合わせてできる二字熟語の意味とほぼ同じになるように、例にならってそれぞれ答えなさい。(A群は同じものを使ってもよい。)

(例)	胸 <small>むね</small>	A群
	<input type="text"/>	
	ぎ	
	心	B群
	<input type="text"/>	

(答え)	胸
	<input type="text"/>
	ぎ
	心
	<input type="text"/>

A群  
 卜 木 友 貫 斤  
 丁 才 毒 馬 蚤

B群  
 イ 介 力 木 次  
 女 庸 黄 艸 田  
 酉 己

5	4	3	2	1	
肩	身	骨	頭	手	A群
<input type="text"/>					
らし	え	り	ち	き	
<input type="text"/>	B群				
準		苦	限		
<input type="text"/>					
	勢			着	

平成二十八年入学試験(一次)  
**国語解答用紙**

受験番号

番

氏名

解

答

得点

五		四					三			二	一	解
B群	A群	問五	問七	問七	問四	問一	問十	問六	問一	1	1	
1	1								1			
<input type="text"/>	<input type="text"/>											
着	き											
2	2								3	2	2	
<input type="text"/>	<input type="text"/>											
限			問七	問八			問十	問七				
<input type="text"/>	ち											
3	3				問五	問二				3	3	
<input type="text"/>	<input type="text"/>					2			問二			
苦												
<input type="text"/>	り		問七	問九			問十	問八				
4	4				問六	3			問三	4	4	
<input type="text"/>	<input type="text"/>											
勢	え						と	問九	問四	(おむ)	(む)	
5	5								問五	5	5	
<input type="text"/>	<input type="text"/>											
準	らし									(める)	(む)	
<input type="text"/>												
		20										
												得点

合計
----